



沖縄キリスト教平和研究所

ニューズレター 第3号 2012年9月

巻頭言

所長 大城 実

青天の霹靂とはこのことか。今日(9月19日)森本防衛大臣が日米間の合意としてオスプレイの「安全宣言」を行った。「やっぱり！」という溜息に似た呟きが聞こえてきそうである。対処策を考えていると尚徳の死に伴う王位争いのことが頭に浮かんできた。安里大親は、「虎ヌ子ヤ虎、悪王ヌ子ヤ悪王。物呉ユシドゥ 我御主 内間大主ドゥ 我御主」といって金丸を王に推挙したとのことである。通常「物呉ユシドゥ 我御主」だけが引用されて沖縄人の事大主義、乞食根性を指す言葉として理解されている。しかし、文脈のなかで読むと、ここには明確な政治姿勢がある。君主又は為政者の勤めはその民衆の安寧・平和を実現することにあるとする。政治家への警告であり、又市民に対して「豊かに生きる」権利の自覚を促すことばである。革命への呼び掛けと言っても過言ではあるまい。

私が2012年の今日この「史実」に関心を引かれるのは安里大親のことばの故である。「物呉ユシドゥ 我御主」だけが引用されて沖縄人の事大主義が批判されてきた。軍事基地の問題にしても、沖縄人は金が欲しいから基地反対の声を上げていたのだと嘲弄されてきた。今我々の願いがまたもや踏みにじられようとしているとき、吾々のDNAに流れているはずの智慧と勇気を出して主張したい：民衆の声を聞かず、安心して豊かに生きる権利を提供できない者は政治家ではない。その権力の座から去れ！と。吾々には平和に生きる権利がある、と。

今回も多くの方にご協力戴いた。イム・ボラ氏は前回に引き続いての力作である。友利廣氏には小国論への誘いとしてマルタについて3回にわたり講演していただいた。4月には「沖縄における教会の歩み—苦難の中での平和への願い」の第2シリーズを始めることができた。

他団体との共催による講演会にもぎやかであった。わたし自身は体調を崩してそれらの講演を拝聴することは出来なかったが、好評だったことは人づてに伺っている。残していただいた資料を是非見たいと思っている。皆さんから催促のあった連続講座の講演録がやっと刊行されました。講演録はご協力いただいた先生方の尊い足跡であるとともに、沖縄の教会の足跡でもある。巻頭言にも触れたが、聞きっぱなしするのでなく、研鑽・検証を続けたいと思う。

私的なことで恐縮だが、入院中にご心配をおかけしました。神様は未だわたしに仕事を残しているようです。ガンバリマス。

(目次)

巻頭言

女性の視点で語る韓国教会(2)「民衆神学に立つ教会形成」これまでの活動

連続講座講演録発行 オスプレイ県内配備に対する反対声明

慈しみとまことは出会い、正義と平和は口づけし、まことは地から萌えて、正義は天から注がれます。

(詩編 85:11-12)

学校法人
沖縄キリスト教学院
沖縄キリスト教平和研究所
〒903-0207
沖縄県中頭郡西原町字
翁長 777 番地
TEL.098-946-1279
FAX.098-946-1312
<http://www.ocjc.ac.jp>
E-mail:ocpi@ocjc.ac.jp

女性の視点で語る韓国の教会(2)

「民衆神学に立つ教会形成」

イム・ボラ

韓国キリスト教長老会 ヒャンリン教会 副牧師
2010 年当研究所特別研究員

[はじめに]

韓国キリスト教をキーワードとしてインターネットで探してみたら、統一協会やムン・ソンミョン(文 鮮明)の写真が出てきて、びっくりしました。もしかして、韓国キリスト教として、統一協会が紹介されているのではないかな?という心配をしました。

実は、現在の韓国キリスト教は、韓国の社会からの信頼が非常に低くなっています。韓国の人口の 18%が、プロテスタントのキリスト者ですが、25%だった時もありました。

最近では、プロテスタント教会からカトリック教会へ移る方もずいぶんいます。ソウルに行くと、地下鉄や道で伝道をしている方がよく見られます。その内容はほとんど同じですが、‘イエス天国、不信地獄(ふしんじごく)’です。でも、実際、プロテスタントの人口は減っている。そして、その主な理由の中には、このような伝道のやり方がとてもきらいだから。。とも言います。そのほかにも、プロテスタントは、排他的だ、イエス天国、不信地獄という単純な教理をもっている、独りで、独善だ、自分だけ偉いと思うが、実はそうでない、しゃべるのばかりで実践は全然しない、家父長的だ、エゴイストだ。。。それ以外にも、牧師中心、献金を強調し、強要するなどです。このような話をするのは、わたくしにとって、とても恥ずかしいことですが、どうしてプロテスタントの人口が減って、信頼を受けてないかということに答える為には、正直に語るしかないと思います。

それでは、韓国キリスト教の歴史的な時期区分の話から、始めたいと思います。

沖縄キリスト教史とも、つながる部分がありますと思いますが、1910 年から、韓日強制併合で、植民地の時代が始まります。そのとき、日帝に抵抗する運動、取り組みの先頭には、キリスト者がいました。各地からの独立運動、ハングル補給、身分の差別をなくすための運動をはじめいろんな活躍がありました。1919 年には、3.1 独立運動をはじめ、特に独立宣言書を作成した 33 人の中には、16 名のキリスト者がいました。(牧師 12 名、長老 1 名)そして、4 月には、ジェアムリ事件と言う、日本軍による虐殺、放火事件がありました。その事件で 29 名が殺されますが、その人たちは、もちろんジェアムリ教会の信徒でした。朝鮮のキリスト者と日帝の関係をよく表している事件だと思います。

しかし、1930 年からの日帝末期に入ると、殉教(代表的には、ジュ・ギチョル牧師)から、受難、そして、受容から 積極的な変質に変わります。

3.1 独立運動のあと、日本人化の政策がもっと厳しくなり、1931 年から 1945 年までの日本の太平洋戦争の時は、神社参拝を強制し、1939 年には、約二千人の牧師と信徒が投獄(とうごく)され、20 箇所以上の教会が、閉鎖(へいさ)され、その後、また、三千人ぐらいが、投獄され、200 箇所以上の教会が閉鎖されます。その中で、朝鮮の教会の中にも、神社参拝、礼拝の中での国民礼式を行ったことがあります。それについて、ハム・ソクホン先生というキリスト者(クエイカー)で、非暴力運動をリードした方は、‘苦難の韓国民衆史— 意味から見た朝鮮の歴史’という本で、このように言います。

『解放されることがわかっていたら、こんなことは起こらなかつただろう。日帝からの信頼を受ける為には、這うこともして、犬のようにほえ、朝鮮の思想家、宗教家、教育者、知職者、そして留学しながら、米国の使いをし、中国では座席取りをした者たちが、何を知っていたと言うのか。』

生き残るためだったということですが、韓国キリスト教は、これについても二つに分けられます。一つは、何の謝罪もなく日帝の後には、そのまま米国に対する親米につながったか、それとも親日について、反省し、改めて、謝罪の告白をしたか、ということです。2000年、カトリクの主教会議で、植民地時代、積極的に独立運動に参加しなかったことを謝りました。2006年には、キリスト教大韓福音教会の総会で、2007年には、韓国キリスト教長老会の総会で「神社参拝と日帝協力についての罪責告白宣言文」が、発表されました。

“われわれは、長い間、われわれの過ちを是認するよりは、その責任を回避してきたことを告白します。教会のまことな復興は、過去についての懺悔から始まることを信じます。1. 神社参拝の罪を悔い改めます。2. 日帝の侵略戦争へ協力したことを悔い改めます。3. 神社参拝と日帝協力への罪を今まで、懺悔し、清算することが出来なかった罪を悔い改めます。”

韓国キリスト教長老会も、このように謝罪告白が出るまで、こんなに時間がかかったということは、この問題が、どのように敏感な課題で、どのように痛みが深いものなのか、表していると思います。

ソ・ジョンミン先生(ヨンセイ大学、宗教部 歴史神学)によると、韓国のキリスト教の特徴は、次のように、言えます。

1. 日帝末期におけるキリスト教の形態と罪責告白の不在
2. 分断と朝鮮戦争期における韓国キリスト教の功と罪
3. 解放後の主な宗教としての韓国キリスト教の既得権
4. 韓国教会と極端な資本主義、信仰形態の問題
5. 現在の韓国社会における反キリスト教的認識の形成と克服すべき課題

ずいぶん長くこの話をしたのは、韓国キリスト教でこの謝罪告白の問題は敏感なことだということは、先に話をしましたが、植民地から解放された後、教権を持った人たちのなかでこの問題から自由な人はあまりなかったからです。それで、親日から親米に移ったキリスト教の指導者は、解放の後、新キリスト教政権だったイ・スンマン大統領をはじめ、信仰的にも神学的にも、保守的なり、朝鮮戦争が終った後、共産主義に対する反共思想が強かった社会的な影響の中で、ほとんどの教会もそのような反共の影響が強くなりました。親日から親米ということは、政治的にも、経済的にも、まったく同じでした。それで、いまだに日本の謝罪の問題が清算できない理由の中には、日本の政府や国民の認識も問題がありますが、同時に、ナンカン(南韓)のいわゆる指導者たちの立場にも問題があると思います。

1970年代からの、経済的な成長の中で、教会もどんどん成長して行きました。大きい礼拝堂を立てて、個人的、祝福中心の信仰を強調したからです。その流れは、資本主義を信奉する、マタイ 6書 24節に書いてあるように、「あなた方は、神と富とに仕えることは、できない」、主を捨て、富を神として仕えるものになったからだと思います。物欲を象徴するマンモン(mammonism)を崇拝するこの時代に教会も、そのようになっていくことは、とても悲しいことです。

民衆神学は終った、ということは、このような韓国キリスト教の流れで、誰も認めてくれない、追い出されているからだと思います。

この前は、民衆神学の思想的な背景として西欧の神学について説明をしたが、韓国の神学の流れの中では、進歩的歴史神学(キム・ジェジュン)/自由主義な実存神学(チョン・キョンオク)/土着的な生命神学(ハム・ソクホン)から思想的な影響を受けました。

進歩的な歴史神学、あるいは、進歩的な歴史参与神学と呼ばれるこの神学は、根本的な保守神学

を改革し、長老会の改革派の伝統に改めていく立場からの神学的な批判といえます。それで、福音の自由精神、信仰良心の自由尊重、社会倫理的な責任意識、聖書を批判的に研究することを受容する、などが基本精神となっております。

自由主義的な実存神学は、メソジストのウェスレーの伝統から出ますが、正統教理、聖書の靈感も重要だが、それよりは、いまここでの生がもっと重要な実存(じつぞん)の神学を強調します。ここで、土着(どちゃく)化神学や、宗教文化神学の流れが始まります。

そして、土着的な生命神学は、制度的な神学者や教会からは、冷遇されましたが、韓国的な神学の代表とも言えます。主な主題は、苦難、命、シアルと呼ばれた民衆、主体的な超越などでした。教理的な救い、教師中心、専門神学者の特権意識などを強く批判しました。

ここで、韓国キリスト教の教派も語りしたいと思います。もちろん、ルテルもあり、聖公会もありますが、長老会、メソジスト、聖潔教(ホーリネス)、バプティスト、純福音がかなり多いと言えます。そして、また長老会は、大韓イエス教長老会(合同/統合)、韓国キリスト教長老会に分けられ、大韓イエス教長老会には、合同/統合以外にも120ぐらいの教派に分けられています。

このように、韓国から来たキリスト者は、自分が意識しているか、そうではないかに関係なく、属している教派が多様で、信仰のカラーもずいぶん違います。信徒にとっては、別に関係ないかも知らないこの教派には、神学の問題が囲まれてします。

2. 民衆神学を基礎とする教会

民衆神学を語るとき、韓国の歴史や社会を語るのには、これを知らなければ、理解することが難しい、そして、人間の生の場とその関係やつながりを認定しない一般の神学、特に普遍性を強調する西欧の神学に対して批判をした、といたしました。

民衆神学の第1世代、ソ・ナムドン先生やアン・ビョンム先生が具体的に教会論はこれだと言う理論的なものはなかったようですが、ソ・ナムドン先生は、キリスト教の歴史は、制度化と墮落の歴史として見ながら、その中で制度化された教会も墮落の産物なので、教会は非本質なものだと思いました。でも、80年代の韓国教会の課題を語る本では、「現場神学を基礎とするカトリック、プロテスタントにつづく、第3の教会の形態としての、‘聖霊の教会’、‘民衆の教会’があるが、その教会は、聖霊の導きに従って発生し、起こるべき時に起こり、消えるべき時に消え、見える形はなく、‘神の宣教’を遂行するであろう。」

アン・ビョンム先生にとっての教会は、1953年に創立メンバーとして参加した、ハンリン教会の四つの創立精神を見れば、どのような教会を思っていた参考になると思います。

ハンリン教会は、1953年、朝鮮戦争を経験し、その悲劇の中から、既成教会に失望し、教派の分裂にも失望した、30歳の若いキリスト者たちが、希望を与えられる教会、言葉だけの宣教や祝福中心の信仰を脱皮した教会を目指しながら生まれました。

それで、4つの創立精神として、教派に入らない独立教会、牧師がいない信徒中心の教会、礼拝堂の側で共に暮す生活共同体、主日だけではなく、日常でも自分の生業(せいぎょう)を通して宣教を続けていく立体的な教会、で出発をします。

結局、ハンリン教会は、創立した27年後に、牧師が必要になり、そのため、教派にも入りました。生活共同体は、一番初めから破れたそうです。それで、今は立体的教会として社会向けの神の宣教を実践し、牧師はいるが、牧師が中心ではない、信徒が中心になる教会として創立精神を受け継いでおります。

ハンリン教会の40周年記念教会として分家したカンナム・ハンリン教会の創立礼拝でのアン・ビョンム先生の説教を紹介したいと思います。

「私たちは、どうしてこの世にきたか。イエスの顔をありのまま描くためだ。多くの教会が描いているイエスの顔は違っている。90%以上の韓国教会は、イエスの顔には全然興味がない。律法主義を守り、ローマからのキリスト論を固執しているから、そのなかで歴史的なイエスは無い。イエスがないキリスト教や教会では、イエスを排除している。イエスではない、ただのキリスト教だ。(中略) 共にイエスの顔、ほんとうの顔を描いてみよう。最後に十字架につけられたイエスの顔を描こう。自分のためではない、他人のために最後の血まで流した。本当のイエスの顔を描きなさい。」
といいながら泣きました。

アン先生の韓国教会に対する批判は強かったが、教会への愛情をもち、1953年ハンリン教会を初め、1970年代には、独裁政権によって大学から追い出されたソ・ナムドン先生を初め、多くの教授と共にガリラヤ教会を、1980年には、アン先生から影響を受け韓国のプロテスタントとしては、初めて女性の共同体、韓国ディアコニア姉妹会が始まります。そして、1987年には、ハンラ山、ベクト山の名前をつけたハンベク教会に創立者として参加をしました。先生は、1996年になくなりましたが、先生の影響を受けた教会は、今までがんばっております。

とにかく、第1世代の民衆神学者は、その時代の教会へ向けての預言者の役割をしました。アン・ビョンム先生は、イエスと民衆が共にいたその場を教会の始まりだと見ました。それで、民衆教会だけではなく、木曜のお祈り会、集会、労働者がいる現場を教会といいます。そして、民衆教会は、聖書解釈を民衆の生の中に返すことから出発しなければならないと言います。牧師ではなく、民衆(信徒)が中心になる教会、権勢的な構造のない教会が、民衆教会の具体的な課題だと言うことです。

これらの批判は、先に紹介したアン先生の説教に出たように、韓国教会は教会からイエスを追い出し、教理だけ残っているところから始まります。

民衆神学を基礎とした教会は、民衆の叫び声を聞きながら、それを伝達する現場の教会、聖霊の教会、民衆の教会といえます。

3. 民衆神学への提案 『民衆女性神学(韓国の教会と女性)』

イエスを信じます、ということはなんでしょうか？ 教理を信じるのではないということは、ずっと話してきました。言い換えると、イエスの視点を回復することだといえます。年齢、性、階層、人種、性的指向などに関係なく、イエスが見たように隣人を私の体のように愛することです。差別をしないことです。そのイエスの視点で人を見ながら、人間としての権利を主張していくことだと思います。

[韓国教会と女性]

韓国の歴史や教会の話をしました。女性たちの参加度は、独立運動でも、独裁抵抗運動でも、民衆化運動でも、労働者運動でも積極的だったし、今もそうです。ただ普通、男性の方がもっと強調されたり、前に立つのは、必ず男性でなくては、という、韓国の社会の家父長制のせいだと思います。

普通、男性の視点を中心になっているから、女性運動や、女性神学では、女性の視点、参加を中心とする研究や集会をしております。

韓国の法律では、戸主制という、夫が戸主になり、夫が亡くなったら息子が戸主になる、女性は戸主にはなれない制度でしたが、2005年にはなくなり、女性の総理も出ましたが、社会の認識を深く掘り下げてみると、勿論、変化はありますが、まだまだだと言えます。世界的にもそうですが、女性と男性の賃金の格差や、女性の妊娠と出産への認識、やはり同じなら、女性よりは男性を選ぶというようなことはずっと続いております。最近では、独身の女性がふえているし、結婚のあと、子供なしのDINK族(Double Income No kids)も増えています。これは、ただ自分だけの生活や仕事の為よりも、妊娠と出産に対する職場での認識不

足、保障制度の問題、教育問題などが重なっているので、‘出産罷業’だともいいます。

韓国の教会での女性問題はもっと深刻だと思います。信徒の63%ぐらいが女性だと言います。でも、韓国の社会の中の家父長的な観点よりは、教会の家父長的な観点がもっと深いです。メソヂストは1955年に、キリスト教長老会は、1974年に、イエス教長老会の統合派は、1995年、女性牧師制度が始まりますが、合同派は、まだ強く反対をしています。バプティストは、去年の総会で投票をしたが、56票が足りなくて、否決になりました。全体的に言うと、韓国の教会の女性牧師は、5%です。(メソヂストは5%、キリスト長老会は6%、統合は3%)

でも、牧師になる為の過程がずいぶん厳しくなり、特に女性よりは、男性という風土では、インターンの過程を受け入れる教会を探すことがむずかしいので、女性牧師がだんだんと減っていく可能性があると思います。そして、教団の総会に参加し、政策決定の過程に参加できる女性の数もかなり低いです。30%は女性を参与するようにと勧告しても、守っていません。その他にも、固定化された性の役割で、食堂での奉仕、バザーの開催と準備、掃除、などは、女性信徒の仕事になっています。

今までの、キリスト教が男性中心、家父長的ということは、確かなことです。その中で、女性たちは周辺で抑圧されてきました。

それで、最近では、民衆女性神学と言いますが、女性神学者から、この民衆神学も男性中心となっているのではないかという批判を受け、これを超えていくために女性神学者との対話、共同研究を通じてがんばっています。

1980年には、女性神学者協議会が生まれ、女性の経験を基礎とした聖書の解釈を展開しながら、民衆女性のアイデンティティを持つ神学を目指してきました。性差別問題への取り組み、理論的な成立など多様な活動をしました。

現代の主な女性キリスト者による活動を紹介したいと思います。

1984年には、韓国女性神学会が始まり、もっと広く活動を続けていきます。1986年には、女性民衆の経験を基礎とする“キリスト教ヨミン会”が生まれ、民衆教会の女性牧師、青年たち、女性労働者と共にいろんな活動や取り組みをしました。その後も、キリスト教女性平和研究院を作って、女性運動の現場、女性神学に基礎とする教会、韓国の教会で行っている説教を女性の視点で分析をして、女性民衆教会運動を広げます。勿論、女性牧師の制度や、民族統一運動、民衆化運動に取り組みをしました。

1989年には、女性教会も始まりました。1998年大学には、女性神学研究所が作られました。

アン・ビョンム先生もマルコに出ている女性がイエスのまことの弟子と言ひ、イエスが使った表現の中には、女性的なものが多かったし、イエスが受難を受ける時も女性たちがいたし、復活した後、初めにあったのも女性だったので、マルコの話は民主的で、女性的だ。これは、イエルサレム教会への抵抗だと言います。

でも、まだ女性は民衆神学でも、周辺にいます。やはり、この課題は誰かに任せるのではなく、女性たちが連帯しながら、作るべきだと思います。それで、わたくしも女性たちの経験を分かち合い、一人ではなく、共に連帯する共同体を作るための聖書研究会を2005年から始めました。研究会の後にも、一緒にいろんな経験を続けて分かち合った人たちは、週に1回、神学や人文学の本を読みながら、女性の人権、少数者の人権、平和運動への取り組みにも参加しております。

民衆神学が民衆の主体性に目をつけたように、女性の経験や事件に目を広げていくべきだと思います。

女性のリーダーシップとか、組織についても関心があると思いますが、それは、‘場’を作り、女性が経験していることを語りながら、はじめることだと思います。いまの女性が経験することは、

聖書に出ている、時には、名前も知られてない女性たちとも一致することが出来ます。性暴力の経験、DV の経験をはじめ、さまざまな話が出ますし、社会の中でも、今起こっていること、民衆女性の出来事は続いております。

[終わりに]

わたくしにとって、沖縄で民衆神学を語るという意味は、今までの歴史のながれで、抵抗をしてきた韓国(朝鮮)の民衆と沖縄の民衆は、協力をしながら、連帯を堅固にしていくべきだと思うからです。連帯が始まると、共に苦難を超えていくことが出来ます。自分ばかり見るだけでは答えは出ませんので、一緒に取り組みをしていく途中で、隣人を通じて、自分をはっきりと見ることも出来るし、答えも探せるのではないかと思います。

韓国と沖縄の教会の宣教協力を目指しながら、ブラジルの格言を紹介しながら、終りたいと思います。

“When I dream alone, it is just a dream. When we dream together, it is the beginning of reality. When we work together, following our dream, it is the creation of heaven” (adapted Brazilian Proverb)

(一人で、夢をみると、それは、ただの夢。でも、一緒に夢を見ると、それは、現実の始まりだ。そして、私たちの夢を追いかけながら共に働き始めると、それこそ、神の国の創造だ。)

(2010年4月6日、日本キリスト教団沖縄教区との共催講演会より)

※前号記事でこの講演会の日付が2011年となっていました。2010年に訂正します。

【これまでの活動】

○ 主催行事

2011 年度公開講座

講師：友利 廣氏（当研究所客員研究員、
沖縄大学教授）

主題：小島嶼国マルタの非同盟中立外交と経済発展経路——その挑戦の軌跡

小国（人口150万人以下）の発展事例を議論することによって沖縄の将来展望につなげる。小国問題登場の契機は国連の植民地独立付与宣言

（1960年）に始まる。大国に翻弄される小国論から主権国家体现者の小国家論を考える。地理的要衝性に翻弄される小国が存在する。しかし国際関係で規定される要衝性を逆手に国家発展につなげることも可能。冷戦構造を逆手に非同盟中立外交で国を発展させ、またその冷戦構造終幕を見越してEUに加盟し更なる経済発展を仕掛ける小島嶼国マルタは格好の事例である。

世界で成典化憲法を置いているのは187ヶ国。そのうち平和主義条項憲法を設けているのは156ヶ国と言われるが、それを経済発展につなげている国はマルタやコスタリカなど少数である。こうした平和主義（非武装・非同盟中立）と経済発展を結び付けているマルタを考察することは、軍事基地に囲まれている沖縄の経済発展とリンクした平和を考える上で大いに参考になろう。

第1回 3月10日（土）18時

小島嶼国マルタの諸相——小国論への誘い

第2回 3月24日（土）18時

小島嶼国マルタの非同盟中立外交と
経済発展経路

第3回 3月31日（土）18時

小島嶼国マルタの拡大EU加盟と
小国経済の挑戦

復帰 40 年企画「映像と学習」

- 第 1 回 4 月 16 日(月) 基地の中の沖縄
- 第 2 回 5 月 7 日(月) 復帰の密約
- 第 3 回 5 月 21 日(月) ドルから円へ
- 第 4 回 6 月 4 日(月) 730 を知っていますか
- 第 5 回 6 月 18 日(月) 笑う沖縄

特別講演会「憲法記念日を覚えて」

5 月 1 日(火) 18 時

I 部・映画「日独裁判官物語」

日本とドイツは戦争、敗戦、焦土からの復興、国際社会における役割、国民性において似ているといわれるが、戦後処理、環境汚染への対応ではドイツにできたことがなぜ日本にできないのか、と言われてきた。この記録映画『日独裁判官物語』は日本とドイツの裁判官の日常を比較することによって、現在の日本の司法の問題点すなわち、裁判官の市民的権利の問題、司法の行政・立法からの独立などを的確に浮かび上がらせ、更に広く日本社会の在り方を問う作品として話題になった。

II 部・ショートトーク「憲法と裁判所のはなし」

講師：中原俊明氏（本学学長）

学生活動（TEAM 琉球）

学生と共に沖縄の歴史、沖縄戦、米軍基地の現状などを学び、学生が主体となって様々な発信をしていく。

1. 2 月 17 日（金）現地研修で辺野古を訪れた。
参加は 6 名。
2. 2 月 29 日（水）、3 月 1 日（木）に明治学院大学国際学部・高原ゼミ校外実習に合流。参加は 1 名。
3. 3 月 7 日（水）高原ゼミとの交流会。場所はシャローム会館 1・2 教室。参加者は TEAM 琉球から 4 名。運営委員 6 名。高原ゼミ 10 名。
4. 3 月 26 日（月）～27 日（火）に伊江島研修合宿を行なった。参加者 8 名。伊江島の戦跡、反戦資料館を見学。宿泊は民宿「土の宿」。
5. 5 月 6 日から毎週日曜日午後 5 時～5 時 30 分に FM21、FM レキオで番組「TEAM 琉球」を担当。
6. 6 月 23 日（土） 6・23 国際沖縄反戦集会（魂

魄の塔広場）に参加した。8 名。

7. 7 月 15 日（日）～16 日(月) 佐敷教会キャンプに参加（4 名）
事前に児童養護施設・愛隣園の歴史、沖縄戦との関係について学び、キャンプに際しては特に愛隣園の子どもたちと密接にかかわる役割を担当した。
8. 8 月 21 日（火）山形の独立学園から 6 名来沖。
申し出があって交流会を行なった。
9. 9 月 9 日（日）オスプレイ配備に反対する県民大会に参加。6 名。その際に琉球新報の取材を受けオスプレイ特集記事として掲載された。
10. この新聞記事を見た株式会社ルーツから呼びかけがあり、9 月 13 日（木）同社で東京国際大学・宮下ゼミ（16 名）、琉球大学、沖縄国際大学、名桜大学の学生（各 1 名）と交流会を行なった。また、夜にはラジオ収録に東京国際大学の学生にもゲスト出演してもらった。
TEAM 琉球 7 名参加。
11. 9 月 13 日（木）読谷の知花昌一さんを訪ね、チビチリガマ、シムクガマ、象のオリ跡地について詳しくお話を聞き、案内してもらった。参加 7 名。
12. 9 月 17 日（月）、沖縄大学でオスプレイに関してシール投票、ハンガーストライキ、ライブなどを行ってきた学生グループ 5 名と、県民大会で高江を忘れてはならないと訴えた琉球大学の学生 2 名と、TEAM 琉球 7 名で顔合わせ、交流会を行なった。今後オスプレイ配備に対して共同して取り組みをしていくことになった。
13. 来年の 6・23 国際沖縄反戦集会の実行委員に TEAM 琉球が加わることになった。若い人たちがもっと参加できる会にしたいとのことで依頼された。
14. 2012 アーロン&アッシュ スピーキングツアー in 沖縄のスタッフとして協力することになった。

連続講座Ⅱ

戦後の沖縄における教会の歩みと回顧—苦難の中での平和への願い

第1回 4月24日(火)

宮森小学校米軍ジェット機墜落事故から53年
——忘れない・忘れてはならない——

講師：宜野座映子氏(ハーフセンチュリー宮森代表)

第2回 5月22日(火)

戦後のキリスト教運動とYMCA
——沖縄YMCAの発端は沖縄キリスト教協議会

講師：知念一郎氏(沖縄YMCA理事長)

第3回 6月26日(火)

八重山地区教科書採択問題について

講師：藤井幸子氏(いしがき9条の会)

第4回 7月24日(火)

キリスト教と人権

講師：ラサール・パーソンズ氏

(与那原カトリック教会主任司祭)

第5回 8月28日(火)

私の歩んできた道

——普天間爆音訴訟について

講師：島田善次氏(普天間爆音訴訟原告団団長)

第6回 9月25日(火)

米軍の毒ガス撤去と美里教会の対応

講師：芳澤弘和氏(日本基督教団牧師)

第7回 10月23日(火)

沖縄キリスト教団と日本基督教団の合同のとり
え直し

講師：山里勝一氏(日本基督教団牧師)

○ 共催行事

5月12日 パレスチナ問題講演

講師：原 隆氏

(日本・パレスチナ プロジェクトセンター運営委員)

講演：アラブの春からパレスチナの今
《沖縄YWCAと共催》

5月13日 講演会

講師：矢ヶ崎克馬氏(琉球大学名誉教授)

講演：原発と沖縄

《沖縄キリスト教協議会に協力》

5月26日 図書館主催講演会

講師：内村千尋氏(瀬長亀次郎・フミの次女)

講演：瀬長亀次郎と沖縄の人々

——那覇市長時代の父・亀次郎を語る

《図書館と共催》

6月25日 東日本大震災被災地支援講演会

講師：片岡蔄也氏(日本基督教団若松栄町教会牧師)

講演：東北教区被災者支援センター「エマオ」の
こと

講師：片岡輝美(会津放射能情報センター代表)

講演：会津放射能情報センター設立について

6月26日

会津放射能情報センターの活動について

報告を受けての懇談

《日本基督教団沖縄教区と共催》

7月23日 特別講演会

講師：大藪順子氏(フォトジャーナリスト)

講演：STAND～立ち上がる選択

——性暴力被害者が生きやすい社会を目指して

《大藪順子講演会実行委員会と共催》

○連続講座Ⅰの講演録が刊行されました

「戦後の沖縄における教会の歩みと回顧」

——苦難の中での平和の願い——

A4 216頁 販価 1,000円

「沖縄の教会が歩んだ戦後史を生き残った人たちの個人的な関わり・証言を通して教会の戦後史を研鑽し、若い世代に語り継いでいきたい」との思いがありました。あの戦禍を生き抜いた一握りの信徒たちが何を思い、何を証ししようとしていたのか、また67年間吹き続けた米軍基地の押しつけと日米政府による明らかな差別と人権侵害の嵐の中で聖書から何を訊き、何を訴えてきたか。あの時代を生き残った人たちが確実に減少している現在、私たちに課せられた宿題だと確信しています。

私たちは「イエスはキリストである」との告白を他でもなくこの沖縄の地で告白しています。

イエス・キリストは“平和の主”だと宣言します。当平和研究所の基本理念に“沖縄、キリスト、平和”に拘ると断言した背景にはこの認識がありました。私たちは沖縄が外側から押し付けられ背負わされている軍事基地（米軍基地だけでなく自衛隊基地をも含めて）の存在を避けて宣教するわけにはいきません。“平和の主”の福音は理の当然として力によって他者を否定する全ての軍事基地を容認する筈がありません。その存在を許さないはずです。

敗戦後の苦難と矛盾の中でキリストの平和を証言するのに、何処で躓き、何処でどのような課題に耐えなければならなかったのかを、その経験の中から学ばなければなりません。全てを失い、ゼロから教会形成の出発をしなければならなかった先輩たちの歩んだ足跡は貴重な歴史資料です。そこにはまだまだ学ばなければならぬことがたくさんあると思います。それを研鑽・検証することが彼らの働きに応え、歴史を継承することに繋がると信じます。」

（巻頭言・大城実 より抜粋）

《内容》

1. 戦争責任告白はキリスト教会史の分水嶺
平良修（日本キリスト教団沖縄教区牧師）
2. アジア・世界の破れ口に立って
～もはや「何事もなかったように」宣教することはできない～
饒平名長秀（沖縄バプテスト連盟牧師）
3. 私の歩んだ道～天皇教からキリスト教へ～
仲村實明（日本聖公会沖縄教区前主教）
4. 強制集団死から命の尊厳と真の平和を求めて
金城重明（日本キリスト教団沖縄教区牧師）
5. 教会はどこに立つのか
～基地の街の教会の歩みを通して～
名嘉隆一（日本キリスト教団沖縄教区牧師）
6. 植民地の住人として
山里勝一（日本キリスト教団沖縄教区牧師）
7. 平和の実現を目指して 佐藤総理の訪米反対
ハンスト
仲尾次清彦（日本キリスト教団沖縄教区牧師）

8. 戦争と教会・戦後の宮古島伝道
城間祥介（沖縄バプテスト連盟牧師）
9. 教会は歴史を担えたか？
名護良健（沖縄バプテスト連盟牧師）
10. 70余年を生かされて・戦中戦後体験から拾う
中原俊明（琉球大学名誉教授）
11. マボロシの『琉球教会』
～原点への回帰を求めて：何が原点を見えなくしたか～
大城実（日本キリスト教団沖縄教区牧師）

オスプレイ県内配備に反対する声明

沖縄県宜野湾市の市街地の中心にある米軍普天間基地は、沖縄戦 67 年を経過した今も、早朝から深夜まで米軍航空機の離発着訓練を行い、周辺の住民に騒音被害や航空機事故による恐怖を与え続けています。特に、2004 年 8 月 13 日の沖縄国際大学への CH53D 大型輸送ヘリ墜落事故は地域住民を危険に落とし、沖縄県民全体に大きな衝撃を与えました。

日米両政府は、普天間基地が「世界一危険な基地」であることを認識しています。1996 年には全面返還に合意しましたが未だ実現していません。それどころか米国国防省は、2011 年 6 月に、普天間基地に配備してある CH46 ヘリコプターを 2012 年 10 月から垂直離発着輸送機 MV オスプレイに変換すると発表しました。

オスプレイは、開発段階から墜落事故が頻発し実戦配備した後も何度も事故を起しています。今年に入ってからでも、4 月にはモロッコで訓練中に墜落事故が発生し、米兵 2 名死亡、6 月にもフロリダ州で訓練中に墜落事故が発生し米兵 5 人が負傷しました。このような危険極まりないオスプレイを、私たちは、沖縄のいかなる場所にも配備することに反対します。また、地域住民の了解なしに、この危険な軍事兵器を配備しようとする日米両政府に強く抗議します。

私たちは、軍事力によらない平和な社会を願います。普天間基地を即時閉鎖・返還し、オスプレイの県内配備を中止することを強く要望します。

2012 年 8 月 2 日

沖縄キリスト教平和研究所 所長 大城実